

巢鴨の背高童子

巢鴨の駅で山手線から高島平に向かう都営三田線に乗り換えて、吊り環を握って頭上の広告を見上げた途端、まだ電車が動かないうち後ろから肩をつつく奴がいる。

振り向けば携帯を手にしたジーンパンの青年がわざわざ自分の席を立って座れと言ってくれている。私より頭一つ、背が高い。

七十四歳のこの年になるまで、乗り物で席を譲られたことは一度もない。もたもたしていると青年の隣にひとつだけ空いていた隙間に先に座ったつれあいが、折角のご厚意でしよと袖を引っ張る。そうか、譲られた方が妙に遠慮したりすればこの好青年の、文字通り「立場」が無くなるわけだ。この初体験の感銘を反芻するのはあとのこととして、とりあえず、つつましく座らせて貰った。

目的地の西台まで二十分ほど、剃り残したあごひげを撫でながらそんなに俺は爺さんに見えるようになったのかなと、微かに不満に思い、また一方で、検査のために空腹で来いといわれたからメシ抜きで遙々鎌倉からやってきた担癌者ではあるが、未だそれほど消耗して見える筈はないと、独り力んだりして、でもまあ青年の親切は

嬉しく、ほっこりした気分で座っていた。

なにはさておき若い人から席を譲られるという、生涯で初めての体験をした記念日として、この日をしっかりと覚えておこうと思った。

西台で電車を降りるとき、ドアあたりにまだ立っていた青年に礼を言い「生まれて初めて席を譲ってもらった、嬉しいような寂しいような、ちよつと複雑な気分だよ」と感慨を述べたら青年は笑った。白い歯が綺麗だった。

老い先の安寧を願う老人が、巢鴨のとげ抜き地藏にやってきてこの奇瑞に遭遇したかたちというとちよつと出来過ぎか。

こっちの用事は寺参りではなくて先月発覚した直腸癌の、周囲への進展状況と遠隔転移の有無をPET/CTで調べて貰うという辛気臭いものだったから、幸先よく気分を転換してくれた青年の善意がとても嬉しい。しかもこの瑞祥をこれから先、何度も経験出来るほど自分の余命は十分には無いのかもしれないと思いつたら、あの背高童子がよけいに有難くなった。

この「老人入門記念日」から数日後に発売になった週刊誌に「医者のがんになったら」という特集が載った。「余命、治療法、病院選び、臨終・・・一番知りたかった本音の闘病記・・・五人の医師はその

ときこう考えた」と。

早速買って読む。

記事を書いた週刊誌記者は、日頃ヒトの生老病死に向き合う医師が、自分が発病するまで「時間の有限性」に気が付かないということに「正直驚いた」と結んでいるけれど、これは別に驚くことではなく、あたりまえのことではないか。

誰しも自分の持ち時間に限りがあることは知っている。ただそれがどんなに短いかを認めたくないだけである。医者として同じだ。ヒトの死一般と自分の死は全く別の事象である。

癌という病気はそれに気付かせてくれる。

私は自分の冠状動脈硬化が知らないうちに進んでいて、右が九十九%、左前下行枝も九十九%、回旋枝が七十七%の閉塞だと聞かされて、心筋梗塞死と紙一重で暮らしていたことに驚きはしたが、起りうる最期までの時間の短いことを嘆く気にはならなかった。

その後、冠状動脈にステント六本を入れて助けて貰えたばかりか、毎日抗血液剤を吞まねばなくなっていて、それが直腸からの微出血を誘い、それがまた四年前の癌の再発に気付かせてくれたのだから、禍福はあざなえる縄の如しを地で行っているようで、大変な幸運に

恵まれたと思っっている。

「医者ががんになったら」に登場した医師は、皆さん病院の勤務医である。残された時間の余りに短いことを痛感された五人の医師の気持ちに大いに共感しながらも、私は一方でその置かれた境遇に羨望を感じざるを得なかった。医師という属性は同じでも、小企業の経営者としての開業医が癌になると、交代の職能者の得られる可能性のある病院勤務医の癌では、当面する課題はかなり違う。

後継者のいない小規模病院の院長の長期の療養は、結果として閉院しか途は無いから、仮に治療が奏功して癌から生還したとしても、その時には復帰可能な仕事の場合は既に失われている。

避けられない最期まで、いくばくかの時間があるとしてその時間をどういう風に過ごすかという人生論風の課題追求だけに没頭出来れば幸せだけれど、その前に仕事場の始末、店仕舞いの作業がある。

患者、従業員、家族になるべく迷惑をかけないでスマートに店仕舞いをしたいものだが、はてどうなるだろう。

「記念日」の丁度一週間後に送られて来たPET／CTの結果を、情けないことにすぐに開封する勇気が無くて、半日あちこち持ち歩いた後、エエイとばかり一息に開いたら、局所の大きな浸潤も遠隔

転移も無さそうだとある。しめた、これなら受診予定の癌研病院で、
肛門括約筋機能温存手術を希望しても輦蹙を買うことはないだろう
と、少し気が楽になった。

やっぱり巢鴨の背高童子は幸運をくれたらしい。

（ 神庫 二〇一一年三月 ）